

基調講演「命を大切にする教育の充実と動物飼育」

嶋野道弘



1 今、求められている教育

平成8年、中央教育審議会（以下中教審）は、「審議のまとめ」及び「第一次答申」の「今後における教育の在り方の基本的な方向」の中で、これからのお子様に必要な力として「生きる力」を提唱した。

生きる力とは、

- ① 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- ② 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
- ③ たくましく生きるための健康や体力などの全人的な力である。それは、端的に言って、知恵と心をはぐくみ、体をつくる教育であると言える。お子様が生き物と直接かかわる動物飼育は、こうした中での知恵と心をはぐくむのに有効である。また、生命尊重の教育を充実するのに効果的である。

2 求められる教育と子どもの現状

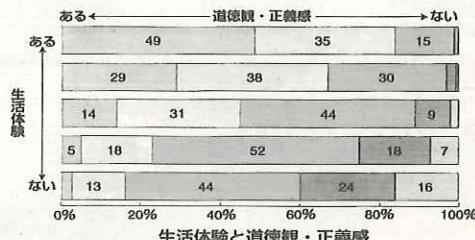
教育は、子どもを取り巻く環境の変化、及びそれに伴う子どもの生活実態と無関係ではない。

(1) 子どもの体験不足・自然離れ

近年、子どもを取り巻く環境が変化し、子どもの体験不足・自然離れ等が問題視されている。

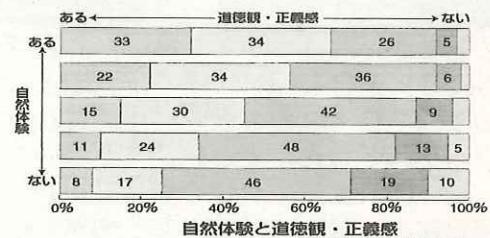
例えば、生命の誕生や死は病院等の施設内の出来事で、子どもがそれに直接立ち会う機会も減少し、生命に対する感動、驚き、喜び、悲しみなどを感じることが少なくなっている。こうした環境の中では、自ずと生命を軽視したり、生命に対する畏敬の念が薄れたりしてくることがある。また、

生き物を極端に嫌ったり、逆に、溺愛・偏愛したりする不自然な傾向も散見される。一方、自然体験や生活体験が豊富な子どもほど道徳観・正義感が身に付いている、という傾向がある。



図表1 生活体験と道徳観・正義感

[生活体験]・・・「小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと」「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったりしたこと」ほか



図表2 自然体験と道徳観・正義感

[自然体験]・・・「チョウやトンボ・バッタなどの昆虫をつかまえたこと」「海や川で貝を取ったり、魚をつったりしたこと」ほか

文部省「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」（平成10年12月）より

(2) 科学の発達と子どもの生活

科学の発達による仮想世界は、子どもたちの思いや願いを手軽に実現できるようにした。例えば、リアリティのあるゲーム機は、アレルギー体质で直接動物に触れることができない子どもの飼育願望を叶えた。また、「一人っ子で寂しい。ペットが飼いたい」という子どもの孤独感を救った。

近年、情報化は子どもの生活の中にも急速に進展している。各種メディアが提供する情報は、子どもにとって有益なものも多い。その反面、行き過ぎた暴力・残虐表現を含む情報や性描写等も少なくない。それが子どもの人格形成に悪影響を及ぼす恐れがあることが指摘されている。

人は科学を発達させて、便利で豊かな文化を創

ってきた。しかし、今日、その文化が子どもを創っていると言える。子どもたちにとって、ますます仮想と現実の区別ができにくくなってくることが予測される。

子どもを取り巻く環境が大きく変化する中で、特に、生命を尊重する教育をめぐる問題は深刻である。

生命は崇高であり、生命は美である。同時に、生命は恐怖でもある。人は崇高で美しいものに惹かれ、慈しみ大切にしようとするし、恐怖を回避しようとする。それが人の本能であり実体である。

しかし、今、人が崩れかけようとしている、と言える。児童生徒の自殺、児童生徒によるいじめや校内暴力事件の発生は深刻である。中学生等による殺害事件、小学生による同級生殺害や殺害未遂事件が相次いで発生し、世の中を震撼させている。かつては考えもしなかった子どもによる重大事件であった。

次のような調査結果がある。

○「死んだ人が生き返ると思いますか」

「はい」と答えた子どもの割合

- ・ 小学校 4年 = 14.7%
- ・ 小学校 6年 = 13.1%
- ・ 中学校 2年 = 18.5%

「命に対する子どもの意識」平成 16 年 11~12 月調査 長崎県教育委員会

生命を尊重する教育の重要性は、誰もが認めるところである。これまで、学校教育においては、生命を尊重する教育や情報化社会におけるモラル・マナーについての教育を行ってきた。しかし、その現状は十分な成果が挙がっていない。これまでの取り組み以上に、子どもを取り巻く環境や子ども自身に大きな変化が起きていると言える。

3 動物飼育と生命尊重の教育

子どもに「命はどこにあるのですか」と問われて、どのように答えれば納得するのだろうか。なかなかの難問である。生命尊重の教育では、頭で知識として分かるようにするとともに、それにとどまらず、行動規範として身に付くようにするものでなければならない。

(1) 生命の存在

カボチャの生命はどこに存在するのだろうか。次のように考えることができる。

カボチャの生命は、カボチャの種をまき、時期が来れば芽を出し、日に日に生長し、花が咲き、実がなることをさまざまと実感すること(存在感)にある。その存在感を実感することが、カボチャの生命を知ることである。

同様に、動物の生命は、例えば、ウサギに餌を

やる。それをウサギがおいしそうに食べる。あるいは、全く食べようとしない。自分が行けばウサギが元気に近寄ってくる。ときには、怪我をしたり病気をしたりして元気がないこともある。赤ちゃんが生まれたり、また死んだりすることもある。それらの一つ一つを実感することが、ウサギの生命を知ることである。

動物を飼育することは、植物の栽培以上に生命的の実在感がある。生命の誕生がどんなに嬉しいことか、また、生命の死がどんなに悲しいことかは、親身になって動物を飼育し、深く動物とかかわってみなければ実感できない。

生命は、生命それ自体が具体的な物や形としてあるわけではない。生命を知ることは、存在を感じ、存在に気付くことである、と言える。

「命はどこにあるのですか？」

と、子どもに問われたら

「命ってあなた自身ですよ。あなたがここにいるってことですよ」

例えば、このように答えてやりたい。

具体的には、生命は次のように捉えることができる。また、次のように捉えることが大切である。

- ① 理性的に捉える
- ② 情緒的に捉える
- ③ 抑制的に捉える

例えば、「心臓が動いている」「脈がある」「血液が体内を流れている」「体が温かい」「顔色がよい」などと見るのは理性的な捉え方である。

また、「生き生きしている」「瑞々しい」「生きるってすばらしい」などと見るのは情緒的な捉え方である。

そして、「ここでやめておこう」「それだけは絶対にしない」「体にいいことをしよう」などと見るのは抑制的な捉え方である。

動物とかかわることによって、子どもは生命の存在を感じ取っている。

—わたしは、ウサギさんを、だっこはできないけど、なぶったら（なでたら）きもちいいよ。ウサギさんは、ふわふわだけど、かたいところもあるんだよ。—

低学年の子どもであるが、生命の存在を「ふわふわだけど、かたいところもある」というように、理性的に捉えている。また、「なでたらきもちいいよ」というように情緒的に捉えている。その中に、抑制的に捉えることのできる芽が育っていく。

牛を飼育した子どもの気付きである。

—（略）とうとう牛が来ちゃって。でも、思っていたより、かわいくて、小さくて……でも、私は、しばらくこわくて近づけませんでした。（略）

でも、そのかわりに「いのち」のこと、すっご

く、すっごくよく分かりました。「いのち」これって、すばらしいです。でも、死んでも「いのち」は生きている。これは、だれにも考えられない神様からのかけがえのないおくり物だと思います。これからも「いのち」を大切に、そして感謝していかなくちゃ、と思いましたー

子どもは、牛の飼育を通して、「すばらしい」「かけがえのないおくり物」「大切に、そして感謝して」というように、生命の存在を情緒的、抑制的に捉えた。

生命を尊重する教育では、「生命は大切にしなければならない」「生命はかけがえのないものである」と観念的に分かるだけでなく、それが実感できるようになることが重要である。すなわち、理性的な捉え方、情緒的な捉え方、抑制的な捉え方を通して、生命の存在に気付くことができるようになる。

(2) 生命と誇りや感謝

牛を飼育した子どもの文にもあるように、生命は「誇り」であり「感謝」であると言える。「誇り」は自身を大切にする心であり、「感謝」は他者を思いやる心である。

「誇り」は、むやみな行動を制御し、自身の立てた規範に従って行動する自律心や、自身を大切にする自尊感情に通じる。

また、「感謝」は、自分の身勝手な意見や行動を制御し、相手の立場や気持ちを理解し、行動しようすることに通じる。

生命を大切にする教育では、自分の「誇り（自尊感情）」を持つことや、「感謝」の念を育むことを大切にしなければならない。

ある中学生は、自分自身を次のように表現した。私の人生現品限り、いつまでたっても今が旬—ここには自分自身を誇りにする高い自尊感情がある。こうした子どもは自分自身を大切にする。それとともに、他者を大切にする傾向が強い。自己抑制力が働き、自他の生命をむやみに殺傷したりはしない。

動物飼育を通して、「誇り」や「感謝」の心が育つ。子どもは、命についての考えを次のようにまとめている。

—悲しいときに誰かに悩みを聞いてもらったり、苦しいときに助けてもらったりすることができるから、生きているって素晴らしいのだと思います。レックスやビリー（飼育していく動物）からそれを分からせてもらいました。それで、レックスが脱臼したとき、私はレックスの力になりたいと思いました。—

ここには、『～のお陰だな』という感謝の念が育っている。それが『～の力になりたい』という気

持ちに連続していく。それは人と人だけでなく、人と動物の間にも成立する。

子どもは、動物飼育を通して、自身の「生命観（生命についての考え方・見識）」を持つようになる。それは、外部からの注入ではない。動物を飼育することを通して、自分で吸収したことである。注入的な教育は効率的である。また、教える側にとっては、教えた、という実感が得られやすい。一方、直接体験を重視した吸収的な教育は、時間がかかり、非効率的に見える。しかし、学ぶ側にとっては、分かった、という実感が得られやすい。—5年生になると、いのちというものをしました。1年間やってきて、いのちはいっぱいあるんだなと思いました。木のいすや紙にだっていのちはあります。いのちは、ぼくたち人間に役立つようにしてくれます。

植物は、ぼくたちが食べています。紙やいすや机や本もみんなのちで作られています。（略）動物もそうです。羊の毛をとって服やズボンにしたりします。牛や豚だって肉にして食べられます。ぼくたち人間は、このようにして動物を殺して肉にしてしまったり、植物も食べたりしています。ぼくたちは動物に感謝しなければなりません。

ぼくたちが育てたレックスやビリー（飼育している羊の名前）は友達のようです。友達と言える理由は、外に出して遊んだり、餌をあげたり、お別れの時に泣いた人もいるからです。お別れした後も、ぼくたちは、あの2頭が友達だと思っています。このように、いのちを大切にしなければなりません。

いのちは、ぼくたち人間を助けてくれる優しさがあるんだなあとと思いました。そういう生きている動物や植物に感謝しなければなりません。—

子どもは、動物飼育などを通して、自ら、自身の「生命観」を創り出している。ほとんど大抵、そこには「感謝」の気持ちが出てくる。子どもが自ら創り出す「生命観」には、内容や論理に不十分な点も見られる。だからだめだ、と言うのではない。ここで創り出された「生命観」は、その「種」のようなものであり、以後、子どもは、様々な体験や学びを通して、自身の「生命観」を再構築していくのである。それが、子どもの真の学びである。「生命観」という、いわば、哲学的なことは奥が深い。一度に確立できるものではない。子どもの発達や体験などに即しながら、自身の中で育っていくものである。その意味において、生命尊重に教育は生涯学習である。

(3) 生命とコミュニケーション

生命は、自分自身や自分を取り巻く人や社会、自然とコミュニケーション（知覚・感情・思考の